

元八王子のむかしばなし

このむかしばなしは、菊地 正著 東京新聞出版局が昭和六十二年に発行された「とんとんむかし（八王子・日野地方の昔話）」と平成三年に出版された「とんとんむかし十二か月」の中から、元八王子地域に関係のある昔話を抜粋して編集したものです。広報紙「もとはちおうじ」の取材や編集時の参考に供していただければ幸いです。

ご存じのとおり、「とんとんむかし」は、昭和五十六年からシヨッパーに連載され、郷土に対する愛情と、土のぬくもりを守ってくださる人々と、この地を新しい住居とされた方々の、まるやかな関心などに支えられてこれらが出版されたものです。

まだまだ、路傍の石仏に、旧家の土蔵に、風の峠や辻の雑草の影にも昔話がひそんでいるかもしれません。

……自然と歴史のふれあうまち 元八王子……取材の傍ら面白い昔話を掘り出してください。

元八王子地域住民協議会 広報部

□ 猿塚	八王子村↓神宮寺村	1
□ にっこり如来	横町・極楽寺	2
□ 夜遊び地藏	慈根寺↓川村・雲光寺	3
□ 僧正さま不動	八王子城の落城	4
□ 下原鍛冶	山本家一門	5
□ 叶屋めしや	叶谷	6
□ 琵琶ヶ谷	川村	7
□ 山だち姫	川村	8
□ 高鳴りの鱧	元八王子村・八幡宮	9
□ 走り祈願	大楽寺村・叶野	10
□ 代官の難問	八王子の在	11
□ 鵜の森さま	上一分方村	12

□ 三人笠地藏	元八王子村・妙観寺	13
□ 縁起まんじゅう	四ツ谷・お諏訪さま	14
□ 竜神と弁天	下一分方村・西蓮寺	15
□ 虚空のしらべ	二分方村・大沢川	16
□ 六右エ門観音	二分方村・無量院	17
□ 華川の蛭	花川・一本榎	18
□ 天狗の鼻折れ	横川村	19
□ 法力和尚	二分方村	20
□ おついで地藏	元八王子・石神坂	21
□ 鼻取り如来	御豊谷・妙観寺	22
□ 代官ギツネ	慈根寺村	23

猿塚

元八王子村が神宮寺村といわれていたころ、深沢山のふもとに、猿塚と呼ばれる供養塚があった。八王子権現社が、荒れはててしまったとき、この地に足を留めて、再興なされた鉄山無心てつざんむしんというお方が野猿のために築かれたものといわれておる。

無心さまは、伊勢今泉の児玉氏の流れだが、出家され全国行脚しておられた。そして、深沢山に入ると、権現社再建を、祈願の行として、岩くつにこもられた。

厳しい修行のおりおりに、一匹の野猿が、木の実や山芋などを運んでくれた。

「野猿は、権現さまのお使いと聞いていたが、わしの修行を助けてくれるとは、ありがたいことじゃ」

ところが、満願の二日前に地震があり、それから、野猿は姿を見せなかった。

満願の日、無心さまが野猿を探すと、哀れ、山道で岩に当たれて死んでおった。

その後……、この猿塚に参ると悲しいこと、忌まわしいこと、すべて去る〓サル〓といわれたそうじゃ。



にっこり如来

八王子の横町の極楽寺においでのア弥陀さまは、ちよっぴり歯をのぞかせていらっしやるので、「歯吹き如来」とも、「にっこり如来」とも呼ばれておる。

この如来さまは、もとは元八王子村鳥居場の妙観寺においでじゃった。あるとき、妙観寺の法印さまの夢に、如来さまが現れ、「八王子の横町の極楽寺へ参るので、よろしく」と、おっしじゃった。

と同時に、極楽寺の上人さまの夢にもお出になり、「元八王子村の妙観寺へ、われを迎えに参るように」と告げられたそうじゃ。

“同時の夢”というのは、あらたかで、尊いものじゃが、遷座ざなされたあとも、如来さまの、夢告げの冥利みょうりがつづいたということじゃ。

ところで、この如来さまにお会いして、お説法を受けているように感じる人は「歯吹き如来」と呼び、笑っておいでのように見える人は「にっこり如来」と呼ぶそうじゃ。その人々の心根によって、見方がちがうのも、深い趣きがある。



夜遊び地藏

慈根寺じこんじから川村へいく道の山に雲光寺という寺があった。ご本尊の地藏さまはなかなかの美男で、近郷の衆に敬慕されておられた。

ある年、陽気がよくなったところから、地藏さまが、夜ごと遊びまわるといいう、うわさがひろまった。

「酒屋で、酒をねだった」「料亭で、ただ食いした」「後家のところへ、忍んでいった」など……、まことにけしからん話じゃった。

うわさを聞いた、本山のご老師が、「仏といえど、罪は罪」といって、ご本尊の地藏さまを、本山の本堂の大柱にくくりつけてしまわれた。

雲光寺の住職は、あわててご老師にすがり、やっとご本尊を返していただいたそうじゃ。

それからのちは、地藏さまの夜遊びもなくなった。

実は……、夜遊びしていたのは、雲光寺の住職で、この坊主をこらしめるために、近郷の衆やご老師が、「地藏さまには、すまんけど……」といって、一芝居打ったというわけじゃ。



僧正さま不動

八王子のお城が落城したのは、天正十八年（一五九〇）六月二十三日のことじゃが、ちようどそのとき、城中にあって護摩修行をなさっておられたのが、大幡の宝生寺の頼紹僧正さまじゃ。伴僧は、八日市場の西蓮寺のご住職祐覚さまと二人のお弟子である。

寄せ手の軍勢が、ドドツと、攻め入り、三の丸、二の丸、本丸と、火を放ったので、たちまち、紅蓮地獄のさまとなった。

二人のお弟子が、「この場は、いったん、引き上げられては……」と、すすめた。

けれども、頼紹さまも、祐覚さまも、微動だもなさらず、護摩修行をつづけられた。

二人のお弟子も、意を決し、師に従ったそうじゃ。

寄せ手の軍兵が、護摩修行の間に押し入ったとき、「あっ！」と、声をのんだ。

炎の中に……不動明王のお姿をいただいたように、僧正さまたち四人が、厳然と、座しておられたということじゃ。

下原鍛冶

北条氏照さまが、滝山城から、八王子城に移られたとき、城下にあった鍛冶衆を、たいそう厚く庇護ひごされたということじゃ。

この鍛冶衆は、八王子城合戦のとき参陣し、大いに戦ったそうじゃ。

江戸期に入ってから、幕府の保護もあって、またまた盛んになった。その中でも、下原に住む刀匠、山本家一門は、よく知られた。とくに、宗国、国重、周重などが傑

出しておった。

相州正宗の直伝であるといわれ、家康公から、千本槍のご下命があったとき、見事に打ちあげたそうじゃ。

將軍家から、「名匠」の称号を認められ、江戸鍛冶奉行の最上席を得た。「天下の下原鍛冶」といわれ、代々その名がとどろいた。

それが……、のちに、あまり知られなくなったのは妙なことからだという。「下原は、下腹に通じる」といって、切腹と忌まれ、次第に衰微したとか……。

名匠が絶えたのは、まことに惜しまれることじゃ。



叶屋めしや…

大和田村の甲州街道筋に叶屋かのうやという、大盛りで安いめし屋が店を出した。

叶屋という屋号をつけたのは、いいことがかなうようにということと、主人の佐七が大楽寺村の叶谷の出だったからじゃ。

初めは、けっこう繁盛しておったのじゃが、佐七がかけごとで大負けし、首がまわらなくなった。ばくちのカタに、店を取り上げられ、思いあまった佐七は、蔵ん中で、首をくくって死んでしまった。

その後、店を買い取り、めし屋をやるうとした者が何人かおったが、つぎつぎだめんになった。

なんでも、ま夜中になると、蔵ん中から、佐七の首が飛び出して、うらみごとをいうのだそうじゃ。

めし屋が、空き家になったら、こんどは、佐七の首は夜の街道に飛び出した。

人のうわさだと、佐七の首は「うらめしや……」というところのめしや……に、特別怨念おんねんがこもっておるように、聞こえるということじゃった。



琵琶ヶ谷

川村の南の、琵琶ヶ谷には、いまも、不思議な話が語り残されておる。

ある夏のこと、ひとりの琵琶法師が、谷へ入っていった。それから、琵琶の音が、聞かれるようになったというのである。

人々のうわさでは、「八王子城合戦に参陣し、奮戦したという、もとは、名のある武将らしい」と、いうのじゃった。

この谷は、八王子城への間道だったとか。

「法師の琵琶は、討ち死にしたものへの、鎮魂じゃろう」ともいわれた。だが、また、「いや、八王子城が、わずか一日で落城したのは、この間道を教えた、うらぎりがおったからで、その、うらぎりが、この法師らしい。法師の琵琶は、わびる心を、かなでておる」と、いうのじゃった。

いろいろな、うわさ話が消えるころ……、法師の姿も消えたそうじゃ。

だが……、夏草が茂るころになると、だれもおらん谷間から、琵琶の音が、風にのってくるといふ。



山だち姫

猪は、^{いのしし}またの名を山だち姫と呼ぶのじゃが、まこと年を経た古猪は、山姫にも化身するといわれておる。

川村に藤右エ門どのという山名主がおられた。学識も仁徳もあり、しかも、たいそう怪力だったそうじゃ。

ある年の夏、激しい雷雨のあと、山回りに出かけられた。すると、奇異な女が雷に打たれた大木の下敷きになって苦しんでおった。藤右エ門どの
は、（ははあ、これが山だち姫じゃな）と気づかれた。

「お助け申す」と、渾身こんしんの力で大木を退けたそうじゃ。

よろこんだ山姫は「かたじけない。お礼に、なんなりと望まれよ」といった。

藤右エ門どののは、「山仕事で、一番の難儀は蝮まむしの毒。どうか蝮封じを伝授ください」と頼んだ。すると山姫は、「我が道に、錦まだらの蛇あらば、山だち姫に、捕りて食わせん」と歌った。
さて……、この歌が、蝮封じの呪文じゆもんとして、なかなか、よく効いたそうじゃ。



高鳴りの鰐口

元八王子村の八幡宮は、八村八郷の鎮守として、里の衆にあつく崇拝された。

この八幡宮には、源氏の流れの横手右近正殿の息女綾姫さまが、祈念奉納された、額や燭台・鰐口わたなどが納められていたそうじゃ。なかでも鰐口は、「高鳴りの鰐口」といわれ、たたくと、見事によい音色で響くので有名じゃった。

ところで、この八幡宮は梶原家にかかわりが深く、伝えられるところでは、源頼朝公が、鶴岡八幡宮を造宮なさるときにつくられたものだが、どうしても頼朝公の気に入らず、廃宮となるところじゃった。それを梶原景時さまが拝領して、鎌倉から運んでこられたものだといわれておる。

梶原家に縁が深く、近郷の総鎮守でもあるので、宮の宝物もたくさんあった。

それゆえ、しばしば盗賊に狙われた。だが、それもすべて失敗したそうじゃ。

そのわけは……。盗賊が近づくと「高鳴りの鰐口」が、いい音色で自鳴りして知らせたというのである。



走り祈願

大楽寺村の叶谷には、すすきの原があつて、叶野かのうやと呼ばれた。なにごとか、一心に祈念して走りぬけると、願いが叶ったということじゃった。

「走り祈願」といって、お百度参りのように、何度も何度も走り通して、願いが叶った人もあつたそうじゃ。

横川村に、定五郎どのという人がおつた。ある年の秋、風邪がもとで、重い病氣にかかつてしまった。女房のチカさんは、人のすすめもあつて走り祈願をした。

すすきの原にも、厳しい北風が吹きわたるころじゃつたが、チカさんは、走って、走って、夫の病氣快癒を祈つたそうじゃ。満願の日は、みぞれまじりの寒空で、叶野を走りぬけたチカさんは、力つきて倒れてしまった。はたの者が気づかつて、助け起こすと、やがて、目をあけて、「お薬師さまを見た」と、つぶやいた。そして、定五郎どのの病氣は、けろりと快癒されたという。

このお薬師さまは、いまは西蓮寺においでじゃそうな。



代官の難問

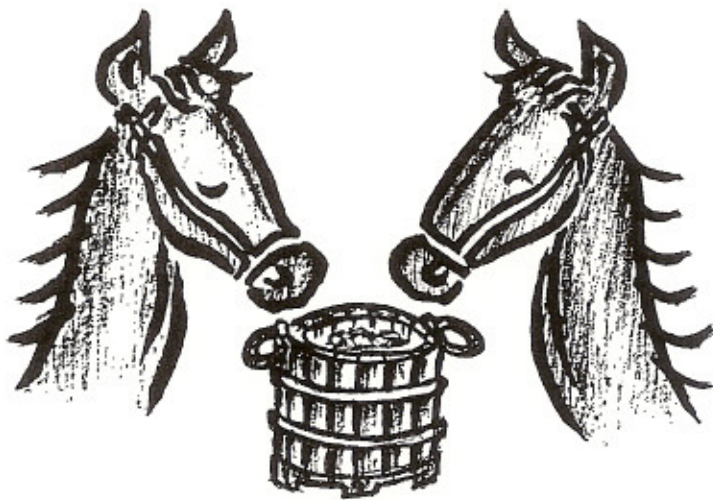
八王子の在に、もんじゃの吉と呼ばれる、たいそう利口もんがおった。ある年の取り入れじまいに、名主どのが、もんじゃの吉のところへあわただしく飛び込んできた。

「弱った、弱った。なんとか、いい知恵を貸しておくれ」

名主どこの話では、今年はず雨が降らず、不作で、お百姓衆が難儀をしているから、年貢米をまけてほしいと、代官に頼んだら、「わしが出す問題を、見事に解いたら、まけよう」と、難問を吹っ掛けてきた。

「ここに、すっかりよくにた二頭の馬がいるが、どちらが親馬で、どちらが子馬か、ぴったり当てろ！」と、いうのじゃった。もんじゃの吉は、にっこり笑うと、「わけはない、二頭の間にかいばおけを置いてやる。さきに食べるのが子馬で、あとから食べるのが親馬さ」と教えてやった。

その年、村のお百姓衆は年貢米を軽くしてもらい、大助かりしたそうじゃ。



鶺の森さま

鶺の森は、明神の沼に、たくさんの鶺がやってきて森に巣をかけたので、鶺森明神といわれた。

上一分方村の鎮守で、祭神は、住吉さまじゃ。

天正のころ、柿本朝臣さまが、都から、この地に下ってこられたときよりの、尊い鎮守じゃった。「万民豊樂」といい、すべての人の幸せを守るので、悪人ばらには、

容赦なく、きびしい神罰がくだされたということじゃ。

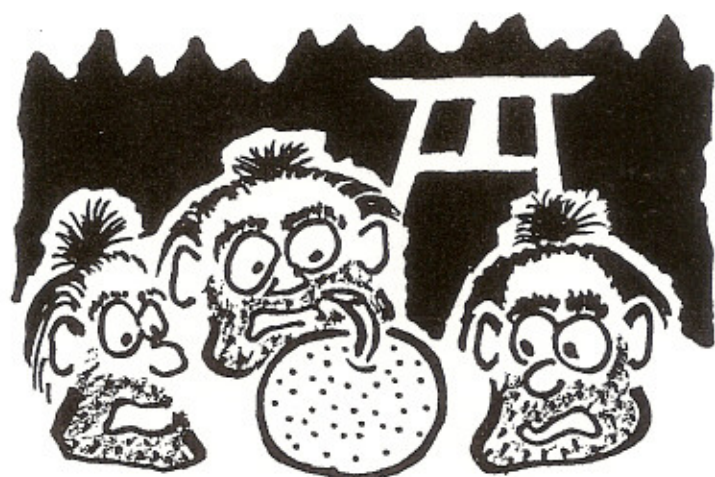
あるとき、村に、三人の盗っ人が押し入った。

三人は、まんまと、鶺森の宮まで逃れてきたが、そこで、急にのどが渴いた。「のどうるおしに……」と境内のなしをもちでくった。

うまかったそうじゃが、ところが……、そのまま、ピタリと、足が地にくっついて、動けなくなった。

三人の盗っ人は、なんなく捕まってしまった。「なしを、くったので……」と、悔しがっていたが、役人たちは首をかしげた。

鶺森の宮には、なしの木が、一本もなかったからじゃ。



三人笠地藏

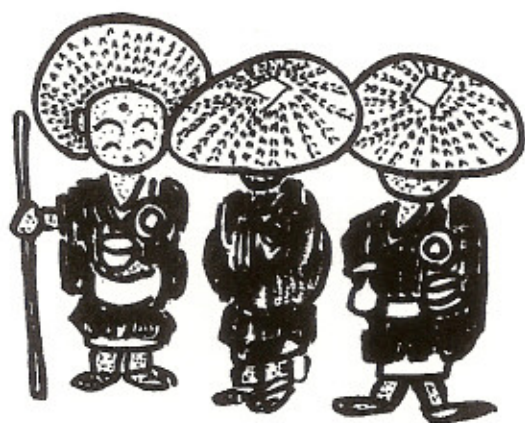
元八王子村鳥居場の妙観寺境内においででの三体の石仏を、笠（かさ）地藏さまと呼んでおるが、地藏さまは一体で、あとは阿弥陀さまとお釈迦さまじゃ。

この辺りは、北条の家風をいただいで、年内餅（もち）をつかぬ習慣じゃ。これは、なんとも不便じゃが、すると笠地藏さまが、里人が困っておるのを見て、元旦の祝い餅などは、運んでくださるといふことじゃ。

さて……、ふだん、ご三仏がたく鉢にお出かけのときは、大石仏であるものだから、ドドン、ドドンと鳴りひびいてお出ましになる。そして、「ありがたい、ありがたい」と、それはそれは、にぎにぎしく布施をお受けなさる。

ところが、里人が困っておるときには、足音も立てん。布施は、ありがたくいただき、法施をほどこすときは、知られぬようになさるといふ、ゆかしい仏さまじゃと。

法施をほどこして帰られる笠地藏さまの後ろ姿を、そっと拝むと、なんと、雪道に、足あともなしということじゃ。



縁起まんじゅう

夏日（なつび）の二十六日は、四ツ谷のお諏訪さまのお祭りじゃ。獅子（しし）舞いなどが奉納され、縁起のまんじゅう屋が軒をつらねるが、いずれも大繁盛となる。このまんじゅうを食うと、開運招福、息災延命といわれるからじゃ。

さて……、横山宿に、まんじゅうぎらいの娘がおった。家は大店（おおだな）で、気立ても器量もよい娘だったが、なぜか縁遠かった。

母ごが心配して、嶋之坊にご託宣を願うと、「一つ、わがママを言っておる」という宣示だった。なんのことはない、まんじゅうぎらいのことで、物知りの老人が、「どんなまんじゅうぎらいも諏訪まんじゅうなら、うまいから、一つ食わせてみるよ」と、すすめてくれた。

そこで娘にわけを話して、「一つでいいから」と食わせてみた。娘も、母ごにいわれて食ってみたが、うわさどおりうまかったと……。

はて、さて、縁談のことも、たちまち吉慶が結ばれたというから、うれしいことじゃ。



龍神と弁天

下一分方村の八日市場に西蓮寺という古刹があり、大日さまを祀（まつ）る本堂の欄間には、見事な龍神が彫刻されておった。

この龍神が、夜な夜な、弁天池に出向くという。弁天さまに恋したという話じゃった。大日さまは愛染の道も司られるから、ほほえましいことじゃ。ところがその折、風雲を巻き上げるので、人馬や家屋や作物に被害が及んだものじゃ。

寺方や村の衆が困っておると、旅の坊さまが、「わしが、龍神をしずめましょう」といって、弁天島に植えられた黄揚（つげ）の一枝を手折ると、楔（くさび）にけずって、「やっ！」と、欄間にむかって投げつけた。

楔は、龍神の胸に突きささったが、見る間に、すっと消えたという。その後、龍神は抜け出すことがなかったそうじゃ。

このことがあってより、西蓮寺に参詣（さんけい）して愛染祈願をする、良縁がさずかるといわれたものじゃよ。



虚空のしらべ

天から降るごとく、りゅうりょうと尺八の音がながれてきた。ところは、二分方村の大沢川のほとりで、旅の男がふと足をとめたそうじゃ。

「これは、虚空（こくう）のしらべ……」という、曲が聞こえてくる方へむかって歩み出した。

この男は、江戸の大盗賊で、鬼あざみという異名で知られた清吉という男じゃった。道は、秋の山路にかかり、やがて、草の戸の庵（いおり）に出た。沢水寺という額の下で、ひとりの坊さまが尺八を吹き続けた。これは、禪の修行のうち、吹禪というそうじゃ。

清吉は、しらべに心を奪われて、いつまでも、坊さまの足下にうずくまっていたという。清吉の心にも、禪の心がしみ込んだものと思われる。

それから間もなく、鬼あざみの清吉が、奉行所に名乗り出て、小塚原で梟首（さらしくび）になったそうじゃ。

悪運あくまで強かった清吉が、なぜ名乗って出たかは、いまも、なぞのままじゃと。



六右エ門観音

二分方村に菅沼六右エ門さまと申される円熟のお方がおられた。学問はあるが昂（たか）ぶらず、財福なのに矯（おご）らず、近在の人々から敬われていた。

ある年、八王子宿からの帰り、由井野の原で夜になり、盗賊に襲われた。

そのとき、六右エ門さまは、身ぐるみ脱いだ着物を、きちんとたたんで賊にわたされたそうじゃ。

賊は、六右エ門さまの立派な振る舞いに心打たれて改心し、菅沼家の作男となって働いたということじゃ。



六右エ門さまも、日ごろは作男たちと野良仕事に精を出し、汗を流しておられた。

この六右エ門さまは、大そう観音さまを信心なされ、朝に夕に観音経を念じておられたが、いつか、作男たちも唱和するようになった。

「朝は、さわやかに、夕べは、疲れがとれた」ということじゃった。

二分方村の無量院は、六右エ門さまが開基なされた寺である。六右エ門観音と呼ばれ、円満利益、福德冥加といって信心された。

華川の蛍

蛍の名所といえは、小宮の蛍見橋とか、川口川の源平淵とか、百草の清涼台下など、いずれもよく知られておるが、華川（はなかわ）の蛍も美しくともるので愛されてきた。

華川は、一本榎（エノキ）の根元から流れ出し、大楽寺村を通過して城山川に合流し、さらに浅川へそそいでいる。

むかし一本榎の下には、優しいお顔の地藏さまがおられたそうじゃ。ある夏のこと、ひどい日照りで村の者が難渋しておるのを見て、はらりと涙を流された。すると、おからだの石が解けて流れ、そのとき、夜空の満天の星も、一つ、すうっと流れたと……。

その晩、村の者たちは、「たくさん星が降るのう」と、空を見上げたそうじゃ。

次の朝、人々はびっくりした。榎の下の地藏さまは消えてなくなり、その代わりに、こんこんと泉が湧き、小川が流れ出していたという。

これが華川じゃ。そして、流れ星のように美しい蛍が、たくさん夏の夜空を飾ったと。



法力和尚

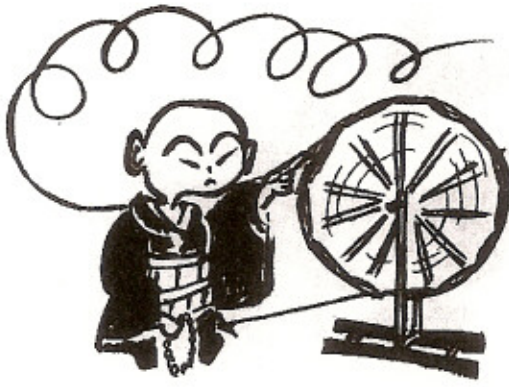
二分方村に、たいそう法力を身につけた知弁さんという坊さまがおられた。悪童が、とげをさして泣いておると、「ほいほい」と法力をかけて、とげを抜いてくださる。とげは、ノミのよりに飛んで出たそうじゃ。

村の道を、あばれ馬がくる。あわや、童女危うし！ と、その瞬間、さっと法力がかかり、馬は、童女の頭上を二間も飛びこしておったという。

ある風の強い日、農家の縁先で、婆さまが、糸車の糸をからませて困っていた。「とけん、ほどけん」となげいておると、知弁さまが、「まずは、わしにかしてみ」と、婆さまから糸口を受けとり、糸巻きを高く飛ばした。

糸は、風になびき、長くキラキラときらめいた。知弁さまは、風にむかって法力をかけた。と……カラカラと快い音をたてて、全部の糸が、糸巻きにおさまったという。

この坊さま、法力和尚と呼ばれたが、なんでも、入寂のときは、飛天光に導かれて西方へおいでなされたそうじゃ。



おついで地蔵

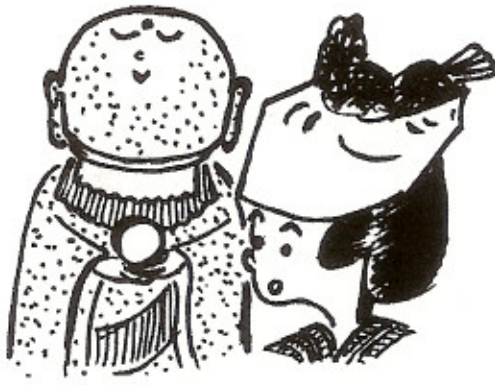
元八王子の石神坂においでの地蔵さまは、おついで地蔵と申されて、それは妙適なご利益がいただけるそうじゃ。

ふつうの信心なら、殊勝に出むいて願掛けするものじゃが、この地蔵さまにかぎっては、あたりまえにはいかん。なにか用足しやら、仕事帰りやら……、たまたま通りかかったならば、ついでに「ちよつくら、たのみます」と願うと、万般あやまたず、念願成就するそうじゃ。

鍛冶屋村のミネという娘などは、はたらき者じゃったが縁遠かったので、両親は心を痛めておった。

ときに八幡宿へ所用に出たお袋さまが「ついでですまんことですが、娘の縁をたのみます」と祈ったものじゃ。すると、間もなく、長房村のお大尽(だいじん)から、またとない話があり、めでたく縁組できたそうじゃ。

さて……、思い当たることは、ついでというのは、用足しやら仕事に精出してのことで、無精でいては、ついでのこともないということらしいぞ。



鼻取り如来

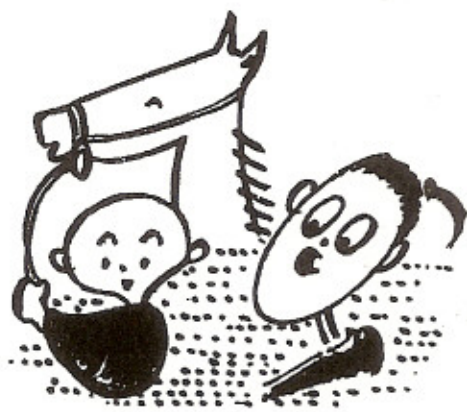
元八王子の御霊谷の妙観寺には、わずかばかりの水田があったが、下僕もいなくて、ひどく荒れておったと。

ある年のこと、どこからか、ひとりの小僧がやってきて、「田を耕す、手助けをしましょう」と、坊さまにいった。坊さまは、小僧がいうままに川向かいの長者の邸を訪ね、「馬を一頭貸してくだされ」と頼んだ。長者は、しぶしぶながら、とにかく馬を貸した。小僧は、巧みに馬の鼻取りをして、寺の田を耕した。

「これは、ありがたい」と、坊さまは大よろこび。

ところが気がつくと、小僧の姿がどこにもない。長者もやってきて、ともども探した。すると、こどもの足跡が、お堂へつづく。そして、本尊の如来さまの腰から下が泥だらけじゃったと。坊さまは、おどろき、涙を流して礼拝し、不信心だった長者も心を打たれて、発心したそうじゃ。

この如来さま、いまでは、故あって、八王子宿大横町の極楽寺においてなさるとよ。



代官ギツネ

八王子の本郷宿からは、慈根寺村にわかれる古い往還があつて、そこから北へいくと、そりや、さびしい原じやつたと。

その原に、だれさまかは知らんが、代官屋敷の跡といわれる、ひどい荒れ屋があつた。実は、この荒れ屋に、古ギツネの眷(けん)族が住まつておつた。こやつら、悪さはするが、人を傷つけたりなんぞはせん。

久保宿の源兵衛の話じやと若い娘が、ほいほいと呼ぶもんで、その気の源兵衛がついていくと、すすきの原ん中に立派な屋敷があつたと。豪家な座敷に案内されて、大ごちそうになつた。酒もたんと出たそうじや。

その席に、袴(かみしも)の男が現れ、「わしは代官じや、代官じや」と、しきりにいばるので、源兵衛も、うま酒をのみながら「代官さま、代官さま」といばらしておつたそうじや。

あとなつて、のんだ酒が小便じやつたとか、料理が馬の糞(ふん)だなんてことはなかつたということじや。いばらしておけば、いつの世も、酒が小便に変わることはないのかも知れんぞ。

